

茶病害虫防除情報

令和5年1月30日

【第3号】

鹿児島県経済連・肥料農薬課

主要病害虫の生態と防除シリーズ

炭疽病

発生と防除のポイント

茶の代表的病害で、本県では特に多い。5月から10月にかけて発生する。特に降雨の多い二・三番茶期と秋芽生育期は発生が多い。病原菌は降雨で伝搬され、新葉に感染する。潜伏期は概ね20日程度で、摘採後頃に発病する。発病による落葉や葉枯れのため樹勢が低下して、その後の収量・品質や生育に影響するため特に秋芽生育期の発生は重要である。

薬剤防除は収穫茶期の二・三番茶期は摘採残葉を守るために萌芽～1葉期散布、秋芽生育期は1～5葉位を守るため萌芽～1葉期と3～4葉期の2回散布とする。

発生生態

病原菌の種類 糸状菌類・不完全菌類 (テイクユア テアエネシス)

発生の状況 普遍的で発生多い 被害大

病徴と診断 初め、成葉化した新葉に不整形の退緑～褐色小病斑を生ず。その後、不整形・大型赤褐色病斑となり、古くなると灰褐色病斑となる。病斑上に微小黒点(分生子層)を散生する。かなり落葉する。

被害の様子 葉枯れ、落葉による樹勢低下で翌茶期以降減収する。

秋期発生は影響大・・・被害は一二番茶の減収・品質低下を招く。

$200\sim 300\text{葉}/\text{m}^2$ 以上で減収 $500\sim 1000\text{葉}/\text{m}^2$ で10%以上減収
一番茶減収率(%) = 1m^2 当たり秋芽発病葉数 $\times 0.01$

病原菌の性質 発育適温：25～30℃ 増殖：多湿・降雨条件の持続で旺盛

伝染・感染方法 越冬：樹上の病斑組織内で菌糸の状態

伝染：病斑上に形成された分生子が降雨で飛散

感染：開葉間もない新葉（上位1～3葉）の毛茸に付着し侵入・感染

分生子付着後葉が12時間以上濡れた状態で感染成立

潜伏期間 小病斑発生まで14～20日 大型病斑発生まで20～30日（高温で短い）

発生活長 主に梅雨期の二・三番茶期と秋雨、台風襲来期の秋芽生育期に発生する。最近一番茶期にも少し発生する。

発病条件 新芽生育期に降雨・多湿条件が続くと多発生する。降雨が最大の発生要因。伝染源病葉が多いと発生は多くなる。
品種と発生：品種間差大「やぶきた・さやまかおり・おくみどり」は弱い。窒素質肥料過多で発生しやすい。

防除法

- 防除のポイント
- ① 二・三番茶期は新芽生育初期(萌芽～2葉期)に予防防除する。
 - ② 秋芽の充実と翌年への伝染源を抑えるため秋芽生育期に重点防除(1～3回)する。
 - ③ 多発状態茶園では整・せん枝により伝染源の一掃を図る。
 - ④ 抵抗性品種を導入する。
 - ⑤ 新芽の生育と降雨状況により感染を予察し、予防効果、治療効果のある薬剤を効率的に用いて防除をすすめる。
 - ⑥ 耐性菌発生を考慮し、ベンズイミダゾール系、ストロビリン系剤は避け、特効的治療効果を示すDMI剤も連用を避け、年1回程度とする。

具体的防除法

二・三番茶芽生育期

薬剤名	希釈倍数(倍)	使用時期・回数	防除時期	使用上の留意事項
ダコニール 1000	700～1000	10 日前 1 回	萌芽—1 葉期	萌芽—1 葉期の降雨前に散布。
クワロシール [®]	500～700	前日 —	〃	輸出茶・有機栽培園に使用する。
ムッシュボルト [®]	500～1000	7 日前 —	〃	〃
クマカート SC	500	前日 —	〃	〃
Zボルト [®]	400	7 日前 —	〃	〃
ベフト [®] 水和剤	500～700	7 日前 2 回	〃	〃
ダコニール 1000 + インターフロアブル混用	1000 8000	10 日前 1 回 7 日前 2 回	1—2 葉期	降雨持続後散布や摘採を遅らせるドリック 茶栽培園等に適用できる。
スコア顆粒水和剤	2000	7 日前 2 回	〃	〃 DMI 剤で連用は避ける

秋芽生育期

防除時期	薬剤名	希釈倍数(倍)	使用時期 回数	使用上の留意事項
秋芽体系防除法	ダコニール 1000	700～1000	10 日前 1 回	予防効果の残効性を活かし降雨前散布
1 回目	フロサイト SC	2000	14 日前 1 回	米国輸出茶栽培園に使用可
萌芽—1 葉期	ベフト [®] 水和剤	500～700	7 日前 2 回	
秋芽体系防除法	インターフロアブル	5000～8000	7 日前 2 回	治療効果は 12 日程度 米国輸出茶栽培使用可
2 回目	オンリーワンフロアブル	2000～3000	7 日前 2 回	治療効果は 12 日程度 やや残留性高い
3—4 葉期	スコア顆粒水和剤	2000	7 日前 2 回	治療効果は 6 日程度 米国輸出茶栽培使用可
秋芽 3—4 葉期	ダコニール 1000 +	700～1000	10 日前 1 回	予防効果のダコニール 1000 と治療効果の DMI
混用 1 回散布	インターフロアブル	5000～8000	7 日前 2 回	剤で秋芽前生育期を 1 回で防除可能
防除法	又はオンリーワンフロアブル	2000～3000	7 日前 2 回	害虫防除の殺虫剤 2 回目と 3 種混用散布

※ 太字剤は地区茶栽培層採用薬剤である。

秋芽生育期薬剤散布時期の芽の生育状態



萌芽-1葉期
秋芽 1 回目散布時期



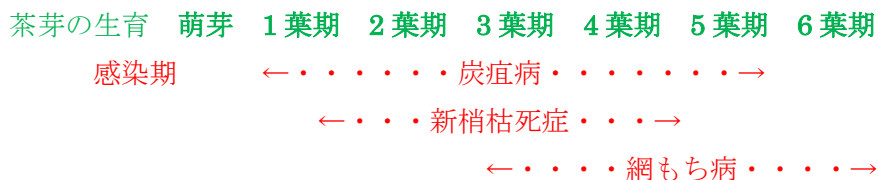
3-4葉期
秋芽 2 回目散布時期
殺菌剤混用散布（新防除法）
ダコニール 1000+インダーフロアブル混用散布時期
オンリーワンフロアブル

参考 秋芽生育期における病害新防除法

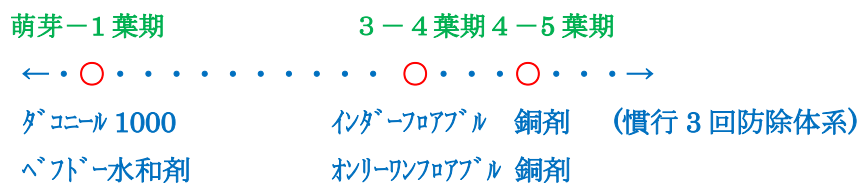
ダコニール 1000 とインダーフロアブルまたはオンリーワンフロアブルの混用散布による防除法

予防効果の長い残効性があるダコニール 1000（散布後 7-10 日程度感染を阻止する効果）と治療効果の高い DMI 剤のインダーフロアブル、オンリーワンフロアブル（散布 12 日程度前までの感染の発病阻止効果）を 2-4 葉期に混用散布する方法により両薬剤の作用特徴を活用し、効率的に 1 回散布で、感染が起こる秋芽生育期の萌芽~5 葉期頃まで概ね 20 日間程度炭疽病、新梢枯死症、網もち病など病害の感染・発病を阻止できる。また、慣行防除法の散布遅れ、残効低下による防除効果低下などをクリアし、防除効果の安定化が図られる。

※ 秋芽生育期の病害感染時期



これまでの慣行防除法（2-3 回体系防除法）



- 欠点 ①予防効果と治療効果の重複作用面があり、無駄がある。
 ②1回目散布(萌芽～1葉期)が降雨などで遅れると防除効果が低下する。
 ③2回目散布が早いと残効が低下し、生育後半期に感染発病が生じる恐れあり。

新防除法 (ダコニール 1000+DMI 剤混用散布防除法)

3-4 葉期

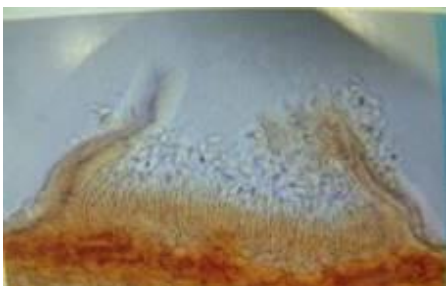


ダコニール 1000 700～1000 倍+インダゴフロアブル 5000～8000 倍混用散布

// +オンリーワンフロアブル 2000～3000 倍混用散布

特徴 ①1回散布で、秋芽生育期間(概 20 日間)の感染・発病を阻止し、安定した防除効果を示す。

炭疽病関係写真



病斑上の分生子層 (ここで分生子形成)



病原菌 分生子



秋芽に多発生状態の茶園



初期病斑



典型的病斑